

## 「サービス・ガール」の周辺

—現代タイの売買春をめぐるエスノグラフィーの試み—

片山 隆裕

### 1. はじめに

1980年代後半以降、タイで深刻な社会問題となったエイズ問題に関して、筆者はこれまで幾つかのテーマを掲げて調査研究を行ってきた<sup>1)</sup>。この過程で、タイにおけるエイズ問題の主な要因が異性間（一部、同性間）性交渉を通じた感染であること、その感染ルートは性行為において無防備で受動的であることを半ば強いられる女性たち（セックス・ワーカー）への買春行為を行う男性客が感染し、その男性から妻や恋人などが感染するというパターンが極めて多いことを指摘した。

タイにおける売買春の歴史は、古くアユタヤ時代にまでさかのぼることができると言われているが、性的娯楽を一大産業にまで発展させた要因は、ベトナム戦争当時、アメリカ軍とタイ政府がR & R (Rest & Recreation) 条約を締結し、アメリカ軍兵士が休養のためにタイを訪れるのを積極的に奨励したことにより、ベトナム戦争終結後はこれが近年のタイ経済を支えてきた観光産業と結びついて展開してきたことは、多くの研究者やジャーナリストの一致した見解となっている。

タイの若い女性たちが、性的娯楽産業にリクルートされる政治経済的・社会文化的背景のひとつとしては、1960年代以降、バンコクをはじめとする都市部を中心に展開してきた経済発展と、その裏返しとしての地方や農村の貧困による経済格差の拡大を挙げることができる。そして、経済発展と平行して発展し

てきた観光産業からの外貨収入増に貧困層の女性たちが組み込まれていったわけである。また、国民のおよそ95%が仏教徒であるタイにおいては、男性（息子）たちは僧侶として出家することが最大の親孝行として考えられる一方、僧侶になることが許されない女性（娘）たちには、経済的に親を扶養するという社会的役割が期待される。この娘たちの親への孝行心・忠誠心が性的娯楽産業に利用されているという側面も否定することはできない。タイにおいても、違法であり好ましくあらざるものとされてはいるが、性的娯楽産業は観光産業、ホテル、クラブ、マッサージ・パーラー、メンバーズクラブ、メールオーダー花嫁、ゴルフクラブなどと密接に関係をもった経済活動になっており、近年では売買春をめぐるグローバルなネットワークの形成も進んでいる<sup>2)</sup>。

1960年代から1970年代にかけての西洋における女性解放運動の高まりを通して、売春は人権侵害、特に女性の権利の侵害という枠組みの中で議論されるようになってきた。タイにおいても、近年、売春の問題は買春を行う側も含めて、エイズ問題との関わりや女性の人権問題への認識の高まりとともに大きな関心事となってきている。また、売春が国際関係、その国の政策、経済事情などとも深く関わっていることも認識されるようになってきた。本稿では、タイ社会において深刻化したエイズ問題と密接な関係があるだけでなく、タイを取り巻く国際関係、政治経済状況と関連し、またタイの社会文化的伝統・慣習とも密接に関わっている売買春をめぐる問題に関して、若干の考察を試みることにする。売買春をめぐる歴史と状況をマクロなレベルで記述したあと、性的娯楽産業に関わる女性たちの語りとその周辺に焦点をあてたミクロな記述を行い、これらを接合することによって現代タイにおける売買春の現状と問題の一端を明らかにしたいと考える<sup>3)</sup>。

## 2. タイにおける売買春の歴史<sup>4)</sup>

### (1) アユタヤ王朝時代から20世紀前半まで<sup>5)</sup>

タイにおいて売買春がいつごろから存在し、盛んになったかを示す明確な証

拠はないが、アユタヤ王朝時代（1350～1767年）には、売春が違法ではなく徴税の対象になっていたことがわかっている<sup>6)</sup>。売春宿は、当時アユタヤの中国人街に集中しており、タイ人や外国人の客がいたようである。チャクリ王朝のラマ1世の時代（1782～1809年）には、中国人の移住者が増加したが、中でも鉱山の苦力や行商など出稼ぎ目的の中国人男性が多く、彼らはバンコクの中国人居住区であるサムベン地区集まって住むようになった。これに応じて中国から売春目的の出稼ぎ女性たちも集まるようになり、この地区において売春が盛んになっていった<sup>7)</sup>。サムベン地区は、その後ラマ4世の時代（1852～1868年）まで非常によく知られた存在であった。この売春婦たちのほとんどは中国人であり、タイ人である場合も中国名を使用していたという<sup>8)</sup>。サムベン地区は、バンコクに住む中国人の商業地区でもあり居住地区でもあったが、タイ経済が発展するにつれて外国人街が新たに形成され、新たな顧客に応じたかたちで売春が拡大するという現象がみられた。

もちろん、売春は外国人居住区だけに存在したわけではない。ラマ3世の時代（1825～1852年）初期のプーケットには、炭鉱労働者としての中国人移住者の増加に伴って売春が発達したし、ラマ5世の時代（1868～1910年）には売春はチャンタブリー、トラート、ナコーン・チャスリ、サムットサコーン、チョンブリ、チャチェンサオなど多くの地方において行われ徴税の対象となっていた。ラマ4世とラマ5世の時代までの売春婦は、本質的には奴隷であった。奴隷はヒトであると同時にモノでもあり、売買の対象にされたが、女性の奴隷の値段は美貌と特徴によって決定された。女性は売春宿に売られたが、このような宿には彼女たちを管理・教育する人物がおり、接客やマナーなどに関して行き届いた教育がなされていたという<sup>9)</sup>。

1905年、ラマ5世は「奴隷禁止法」を導入し、奴隷制度の廃止を立法化した。その結果、多くの奴隷たちが解放されたが、解放された奴隷たちは土地やその他の生活手段もなく、女性の奴隷たちは売春宿に吸収されていくことになる。そして、奴隷女を持てなくなったタイ人男性が売春宿に足を運ぶようになり、国内のいたるところで売春婦や売春宿の数が増加した<sup>10)</sup>。1908年には「性病管

理法」が制定され、これが1913年には地方にも適用されるようになった<sup>11)</sup>。この結果、売春宿は入り口に提灯（多くの場合、緑色）を掲げておくことが義務づけられるとともに、売春宿と売春婦たちは健康管理と税金納入のために登録を義務づけられた。これにより、売春宿は営業許可を得、そこで働く女性たちは合法的な立場を獲得することになった。しかし、未登録の—そのため非合法の—売春婦もあり、彼女たちは賭博場、宝籤売り場、劇場などで客を獲得していた。また、この時期と前後して、貿易商人、鉱山労働者、港湾労働者など、主として独身男性の中国人移民が増加し、彼らのタイへの流入が売春に対する需要を生み出した。20世紀になって、外国との関係が多様化するにつれて、売春婦における民族の多様化も進み<sup>12)</sup>、1930年代のタイには、アメリカ人、イギリス人、フランス人、ロシア人、ベトナム人の売春婦もいたという<sup>13)</sup>。

このように売買春は、奴隷制の廃止を通して国家による管理の対象となり、中国人移住者の増加による需要の増大も伴って、タイ社会に定着していくことになる。しかしながら、20世紀前半、タイ政府は外国からの圧力によって、売買春を容認する立場から売買春を乱交の一形態としての犯罪とみる方向への転換を迫られ、女性と売春婦の売買に関する3つの国際条約、すなわち1904年の「白人奴隷売買禁止に関する国際条約」、1922年の「女性と子どもの売買禁止に関する国際条約」、1950年の「人身売買および売春からの搾取禁止に関する条約」（1950）の批准を進めることになる。

## (2) 20世紀半ばからベトナム戦争終結まで

タイ政府は、これらの国際条約を批准した国家として、1960年に「性病管理法」を廃止した。これに先立つ1956年に刑法が改正され、性交渉における同意年齢が引き上げられた。少女や女性を性的満足のために誘惑した者、それに女性の売春による収入によって生活をする16歳以上の者（ただし、売春婦の子どもと扶養者は除く）に対して、罰則が定められた<sup>14)</sup>。1960年には、今日でも有効性をもつ「売春禁止法」が定められ、売買春を乱交（性的サービスを行って報酬をうる乱交行為）という犯罪として定義している。この法律は、売買春に

関わった者は買う側の客を除いて処罰の対象となり、未成年者に対する性的誘惑を犯罪と認めている。また、法を犯したものは店主も含めて禁固3ヶ月から1年の刑、または、1000~2000バーツの罰金を支払わなければならない規定している<sup>15)</sup>。ただ、売春婦の扶養家族の利益は、家族を食べさせるというタイ女性の伝統的役割に従って保護されており、また男性が性的満足をカネで買う権利をもつという伝統的男性観に従って、客を保護するものとなっている。

1966年には「サービス産業法」が成立した。この法律は娯楽を産業の一部とし、大衆の秩序維持と道徳への影響を管理することを目指したものである<sup>16)</sup>。法的には、この産業で働いている女性たちは、「特別サービス」(boorikaan phi-seet) だけを行うとされている。「特別サービス」というのは、売春およびこれに関連する行為の婉曲表現であるが、現実には「特別サービス」は客の要望に応えるものであり、客は罰則の対象にはならない。このように、売春は法的には禁止されていたにもかかわらず、「娯楽の場」では公的なものとされ、その所有者と客は保護の対象となる。

タイにおいて、性的娯楽が一大産業にまで発展した背景には当時の国際情勢と国際関係がある。1960年代に始まったベトナム戦争当時、タイ政府はアメリカ軍に対して水面下で全面的な協力を約束した。タイ国内には8カ所のアメリカ空軍基地が置かれ、ピーク時には戦闘機400機、兵士48,000人が駐留していた<sup>17)</sup>。1967年には、タイ政府とアメリカ軍との間に「Rest & Recreation 条約」が締結され、これによってベトナム駐留のアメリカ軍兵士がタイで休暇を過ごすことを歓迎することになった<sup>18)</sup>。R & R 条約によって、アメリカ軍兵士がタイに落とした外貨は、1967年の500万ドルから1970年には2000万ドルへと急増した。1974年の全国調査では、バー、ナイトクラブ、売春宿などの娯楽施設が2万カ所以上あったようで、特別サービス・ガールを500人以上雇っていたマッサージ・パーラーもあったという<sup>19)</sup>。特別サービス・ガールの需要はますます増大し、地方の貧しい家庭の若い娘たちが性的娯楽産業に吸収されていく図式が確立されていく。そのひとつの要因としては、外国の兵士に「チープでお手軽なセックスパラダイス」を提供し、驚異的に外貨獲得増をすすめていくタイ

表1 タイにおける外貨獲得上位5業種の推移

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
1975	米	もろこし	砂糖	観光	タピオカ製品
1980	米	観光	タピオカ製品	ゴム	錫
1985	観光	繊維・衣類	海外出稼ぎ	米	タピオカ製品
1990	観光	繊維・衣類	コンピュータ部品	米	ゴム
1995	観光	コンピュータ部品	繊維・衣類	IC	米
2000	コンピュータ部品	観光	IC	繊維・衣類	車両・部品など

出所：『タイ国政府観光庁統計年報』、『タイ国経済ビジネスデータベース』（元田時男）により作成。

のしたたかさがあったことは否定できない。

### (3) 観光産業の振興と性的娯楽産業

ベトナム戦争の終結によってアメリカ軍兵士が去った後、タイ政府は外貨収入源の確保という問題と顧客の激減による特別サービス・ガールの失業問題に直面することになった。

タイ政府はこの問題を観光産業の振興による外国人観光客の誘致によって解決する道を模索する。1975年にはタイ国政府観光庁（Tourism Authority of Thailand, TAT）が設立され、インフラの整備や観光施設への投資権限などをもつことになった。また、観光振興法が制定され、タイの観光産業に対する外国からの投資に優遇措置が与えられた。その結果、1980年から2000年までの間にタイを訪れた観光客はほぼ5倍に達した。また、観光による外貨収入は1982年にタイ最大の輸出品目であった米を抜いて、1991年を除いて比較的近年までずっと第1位の座にあった（表1参照）。

タイ政府の観光開発政策は、性的娯楽産業と密接に結びついていく。たとえば、1980年に当時のタイの副首相は、自らが行った地方の役人向けのスピーチの中で、「これからの2年間、われわれに必要なのはカネです。そのため、私は知事の皆さん方に、地方の自然景観について再考されるようお願いしたい。それと同時に…（中略）…ある種の娯楽施設のことを考慮に入れてい

表2 タイを訪れる海外からの観光客と観光収入（1960～2004年）

	観光客数(人)	観光収入 (百万バーツ)		観光客数(人)	観光収入 (百万バーツ)
1960	81,340	196	1985	2,438,270	31,768
1965	225,025	506	1990	2,438,270	110,572
1970	628,671	2,175	1995	6,951,566	190,765
1975	1,180,075	4,538	2000	9,578,826	285,272
1980	1,858,801	17,765	2004	11,650,703	384,360

出所：『タイ国政府観光庁統計年報』『海外労働情報 タイ』より作成

ただきたい。皆さんが道徳的に潔癖であるからというだけで、この種の娯楽施設を禁止すべきではありません。もちろん、道徳を損なうような猥褻さは、妥当な限界を設けて排除しなければなりません、新しい職場を創り出すために、われわれはそうしなければならないのです<sup>20)</sup>と述べている。また1993年にいたっても、タイ南部のある県知事は「娯楽産業で働く女性は、ソクラーン(タイ正月)中、帰省のために休暇をとらずにパレードや催しものに参加して、外国人観光客を喜ばせるように！」と発言している<sup>21)</sup>。このように、国、地方を問わず政府が積極的に性的娯楽産業を奨励してきたが、一方でこの間、タイ政府はNGOや社会学者たちの売春問題への取り組みが観光産業に与える影響を苦慮してか、1984年にはタイの学者が外国で開催されるセミナーや会議の席で、タイ国内の売春問題について言及してはならないという通達を出している<sup>22)</sup>。1987年には「タイ観光年」(Visiting Thailand Year)が、また1998年には「アメージング・タイランド」(Amazing Thailand)といった観光キャンペーンが次々に展開され、外国人観光客、中でもエキゾチックな女性を求める男性観光客に対するアピールを続けることなる（表2参照）。

こうしたタイ政府の観光振興政策に応じて、日本を含めた外国の旅行業界は、タイの特別サービス・ガールを売りものにした商品を次々に発売することになった。例えば、当時の旅行会社の広告には「タイは無限の可能性に満ちた国です。特に女性のことにしては。しかしタイへの旅行者にとって、この未知

表3 タイを訪れる海外からの観光客の男女比(1976~2004年)

	男性(%)	女性(%)		男性(%)	女性(%)
1976	66.7	32.3	1992	65.2	34.8
1978	66.8	33.2	1994	62.2	37.8
1980	71.1	28.9	1996	62.1	37.9
1982	70.5	29.5	1998	61.2	38.8
1984	71.3	28.7	2000	59.8	40.2
1986	67.9	32.1	2002	59.5	40.5
1988	65.8	34.2	2004	57.5	42.5
1990	63.8	36.2			

出所：『タイ国政府観光庁統計年報』より作成

注：近年、海外からの観光客に占める男性の割合は減少しているが、観光客数の増加に伴い、その実数は増加している。

の快樂にあふれる場所にたどり着くまでには、いろいろと戸惑うことがあるでしょう。お好みの女性に出会える場所をブローケンな英語で聞き出すなんてイライラのもとです。わが社はそんなあなたのお手伝いを致します。私どもでは、エロチックなお楽しみが含まれた画期的なご旅行をご用意させていただいております」(西ドイツ「ロージーライゼン社」)や、「スリムで小麦色をしたタイの女性たちは、生まれながらのテクニシャンです。彼女たちはヨーロッパ人男性の知らないテクニックであなたたちをやさしく愛してくれます」(スイス「ライフトラベル社」)などがある<sup>23)</sup>。こうした政府のプロパガンダやこれに便乗した旅行業界の戦略に応じるかたちで、ベトナム戦争終結以後の1976年以降1990年前後まで、タイを訪れる観光客に占める男性の比率は、概ね65~70%前後で推移している<sup>24)</sup>(表3参照)。

このような状況のもとで、1980年代半ば頃から急速に拡大するエイズ問題が社会問題となるが、タイ政府は観光産業へのダメージを懸念して問題の所在を明らかにしようとはしてこなかった。エイズ問題に対するタイ政府の初期段階における曖昧な姿勢は、事の重大さを国民に周知させることや問題解決への対応を遅らせることになり、1990年代に入ってタイ全土にエイズの爆発的な感染

拡大をもたらしていくことになるのである。

### 3. 売買春の政治経済的背景と社会文化的背景

#### (1) セクシュアリティおよびジェンダーと売買春

タイにおける女性の地位についてはさまざまな議論が存在するが、これは女性の地位の定義の複雑さに起因していると思われる。例えば、教育や労働力という社会的指標に関しては、タイの女性は男性に比べて大きな不利益を受けているとはいえない<sup>25)</sup>、経済発展が女性の経済的役割を増大させ、彼女たちの自立性を強化したことも事実である<sup>26)</sup>。しかしながら、これとは別のセクシュアリティとジェンダーに関する社会文化的価値も存在する。それは、主として上流階級においてみられた価値観であり、女性の美貌を重要なものとするイデオロギーである。タイ社会の農民や貧困層においては、女性は経済的役割を担い、ある程度自立性を保ってはいるが、上流階級においては、女性は経済的役割から隔離されており、「女性らしさ」を追求することを期待されてきた。女性は夫に喜びを与えることを期待され、一夫多妻制は上流階級の男性によって、特権的地位と経済的成功の証とみなされてきたのである<sup>27)</sup>。このようなセクシュアリティとジェンダーのイデオロギーがタイ社会に浸透し、ラマ5世時代以降、映画や新聞を通して、また最近ではテレビなどのメディアによって、女性のセクシュアリティが強調されるようになった。1934年に始まる「ミス・タイランド美人コンテスト」は、国家の発展に際して女性の参加を促す装置とみなされ、女性の美貌は彼女たちの成功の基準とされたのである<sup>28)</sup>。今日でも、タイではソクラン、ローイクラトン、花祭りなど、さまざまな行事やイベントの際に、美人コンテストが実施されており、「見る側」の男性と「見られる側」の女性といった二項対立が成り立っている<sup>29)</sup>。

タイにおける売買春とジェンダー役割に関するもうひとつの要因は、タイの娘たちに課せられた両親扶養への社会的期待である。これが、性産業における経済的高収入と連動し、若い女性たちが売春の世界へ入っていく動機づけに

なっている<sup>30)</sup>。特に、母系の社会的基盤をもつ北部タイ農村においては、両親に対するこの扶養義務が強調されることが多いし、同様に最も貧しい地域とされる東北部農村の女性たちの場合と同様、売春はタイ女性のセクシュアリティとも不可分の関係にある。タイでは、一般に「処女性」が重要視され、娘たちは結婚して両親を扶養することが期待されるが、売春婦になった女性の多くは結婚前に処女を喪失していたり<sup>31)</sup>、結婚後、夫と離婚していたりすることが多い<sup>32)</sup>。この場合でも、その女性たちは売春婦として高収入を得、両親に仕送りをすることによってその経済的義務を果たすことができるという意味で、孝行娘として社会から許容されることになる。さらに、売春を男性の性的処理のための必要悪という考え方も存在する。売買春の制度は性犯罪の増加を抑制する効果があるというわけである。この考え方は、「もし男性の性欲を満足させる場がなくなったら、強姦やこれに類する性犯罪はうなぎのぼりに増加するだろう」<sup>33)</sup>と答えたある警察官の言説の中によくあらわれている。

## (2) 経済発展のパターンと性的娯楽産業

過去40年にわたるタイの経済発展は、性的娯楽産業やこれに類する娯楽産業に大いに影響を与えてきた。タイ経済は国際社会との関係の中で発展してきたが、1950～60年代には、特にアメリカによるタイ社会への投資に支えられてきた。具体的には、先述したとおり、ベトナム戦争当時にアメリカ軍とタイ政府によって結ばれたR & R条約を通して、アメリカの兵士と彼らが落とす外貨がもたらされることによって発展してきたのである。例えば、かつては小さな一漁村にすぎなかったパタヤは、アメリカ兵のR & Rの中心として選ばれ、レストラン、ホテル、バー、ナイトクラブ、土産物屋などが多数軒を連ねる一大リゾートとなり、多くの売春婦が活動するようになった。アメリカ軍の撤退後も、現在までタイの代表的な観光地のひとつとして賑わいをみせている。また、タイ国内における経済政策が、農業中心の経済構造から輸出向け工業製品とサービスの提供へと転換したことも看過することはできない<sup>34)</sup>。1980年にタイを訪れた世界銀行の視察団が、タイの経済発展に関する数々のアドバイスを

表4-1 タイにおける所得（GPP）の地域間格差と指数（1981～1991年）

	1981年	1986年	1991年
タイ全国	15,934 (100)	21,594 (100)	44,095 (100)
バンコクおよび近郊	48,764 (306)	64,872 (300)	142,084 (322)
中部	14,411 (90)	17,526 (81)	36,304 (82)
東北部	6,142 (39)	8,342 (39)	14,931 (34)
北部	10,042 (63)	12,840 (59)	23,328 (53)
南部	12,401 (78)	15,589 (72)	27,084 (61)

出所：NESDB 1993 *Gross Regional and Provincial Product Series 1981-1991*, Bangkok (新津・秦 (編) 1997からの引用)

注：所得（GPP）の単位はバーツ。（ ）内は全国を100としたときの指数。

行った結果、工業製品の輸出額は1980年の32%から1990年には64%と倍増している<sup>35)</sup>。

こうした経済発展は、一方で地域間格差や集団間の所得格差を助長し、発展の恩恵を受けない人々の不平等感を高める結果となっていく。例えば、地方別の県内総生産（GPP）の全国平均を100とすると、1991年におけるバンコクおよびその近郊が322であるが、これは東北部の約9.5倍、北部の約6.1倍となっている。1981年の格差が、それぞれ7.9倍（東北部との比較）、4.9倍（北部との比較）であったから、この10年間で格差はさらに拡大したことになる（表4-1参照）。県別の家計所得を比較してみても、上位にランクされる10県は、南部に位置する観光地であるプーケットとソンクラーを除けば、いずれもバンコク周辺の県であり、逆に下位の10県はすべて東北部（7県）、北部（3県）の諸県で占められている<sup>36)</sup>。これらの地域間格差は、1990年代中盤以降においても解消されているとはいえない（表4-2参照）。

北部は山岳地帯が多く、バンコク周辺の中部に比較すると農地が少ない。また、ランナータイ王朝以来の独自の文化や慣習をもつとともに、焼畑農業によって自給自足の生活を行ってきた山岳少数民族の村が多く存在している。また、悪名高いゴールデン・トライアングル（黄金の三角地帯）があり、以前からケシの栽培や麻薬の密売が問題とされてきた地域である。東北部は土地がやせて

表 4-2 タイにおける地域別 GRP の推移 (単位はバーツ。1995~2002年)

地 域	1995年	1997年	1999年	2001年	2002年
バンコク首都圏	200,983	209,787	195,380	210,438	208,680
中 部	80,029	97,566	102,631	119,220	130,838
東 部	127,799	155,052	142,529	168,408	187,264
西 部	52,085	57,153	58,553	62,498	68,827
北 部	33,903	39,263	38,768	39,643	43,987
東 北 部	22,723	25,675	24,508	25,173	27,752

出所：タイ国家経済開発庁 (NESDB) の統計資料により作成。

注：バンコク首都圏とは、バンコクおよび周辺5県 (サムットプラカン県、ノンタブリー県、ナコンパトム県、パトゥムタニー県、サムットサコーン県) である。中部は、バンコク首都圏を除く。

おり、毎年干ばつの影響を受けやすい地域である。タイ政府は、この両地域の貧困の解消に様々な策を講じてはいるが、あまり状況は改善されておらず、所得格差を縮めるためには、バンコクをはじめとする都市部に出稼ぎに行くしか手だてがないという状況にある。

このように、国内における地域間経済格差の拡大は、農村から都市への人の移動を加速させることになる。バンコクでタクシーに乗ると、運転手の多くが東北部の出身だということがわかるが、学校教育を十分に受けていない農村の貧困家庭の女性たちが、家族への経済的援助をするために十分な収入を得る方策は、性的娯楽産業以外にはない。都市においては、村落社会に存在する強固な社会的規制や制限が存在しないため、女性たちはたやすくこの産業にリクルートされることになる。また、このような性的娯楽産業への女性のリクルートネットワークは、タイ経済の国際化やグローバル化と連動して、グローバル化シトランスナショナルなものへと拡大してきている<sup>37)</sup>。

### (3) ツーリズムの発展と性的娯楽産業

タイにおける観光産業の発展は、タイ国内外における社会経済発展と関係している。1961年にアメリカ合衆国商務省は太平洋観光協会と共同で、ある私企業に対して太平洋および極東地域における観光の可能性に関する評価を実施さ

せた<sup>38)</sup>。その結果、タイの観光産業の急速な拡大の可能性があることが指摘され、ベトナム戦争と関連したアメリカ人(兵士)の流入と結びつくことがわかった。1960年には約8.1万人だった外国からタイへの訪問者は、10年後には62.8万人に、1980年には180万人に、1990年には530万人になり、2000年には960万人にのぼり、昨年(2004年)には1165万人に達している<sup>39)</sup>。

観光産業の発展は、産業構造におけるサービス部門の発展を促すことになった。観光産業はタイにおける外貨獲得の主要産業となり、ホテル、レストランなどとともに、性的娯楽産業部門の発展を促した。外国人(特に男性)観光客を対象とした「セックス・ツアー」が盛んになり、女性解放団体の抗議にもかかわらず、現代でも存在している<sup>40)</sup>。例えば、バンコクのパッポン通りやスクムヴィット通りのソイ・カウボーイ、ナーナー・プラザなどのエンターテインメント・コンプレックスは、多くの外国人(観光客)で賑わっている。大音量のディスコ音楽が流れるゴーゴー・バーでは、お立ち台でトップレスや水着姿の踊るタイ人女性たちを眼の前にして、ビールやウイスキーのグラスを傾ける欧米人や日本人たちの数は半端ではない。パタヤやプーケットなどのリゾート地も同じような状況にあるし、南部の中心都市ハート・ヤイ(ハジャイ)のビア・バーやカラオケ店は、隣国マレーシアからの観光客の男性があふれている。もちろん、性的娯楽産業の最大の顧客はタイ人男性であるが、外国人観光客が大きく関与していることも疑いのない事実である。

### (4) 経済とツーリズムの発展とジェンダー

タイにおける経済やツーリズム発展とタイのセクシュリティおよびジェンダーが相互作用をすることによって、タイの性産業の繁栄のさまざまな条件が形成されてきた。例えば、ブラン-ザンソンは、タイの経済構造を長きにわたって支えてきた農業の転換(衰退)、娘への相続パターンから息子と娘への平等な相続パターンへの転換、労働力のプロレタリア化などがタイ社会における女性の地位の低下に結びつき、タイの女性たちは搾取の対象となりやすく、補償が容易には得られないような職業に就かざるを得なくなっていく、と論じてい

る<sup>41)</sup>。こうした状況にあっても、女性たちは両親、きょうだい、子どもたちを扶養するという社会的役割を期待される。娘たちの親への孝行心は、トラクターなどの農業機械や化学肥料の大量購入などのために、親が背負った借金の返済のために都市に出稼ぎに行くことにまで拡大解釈されるようになる。農村にはブローカーが赴いて若い娘のいる農家を訪れ、融資と引き替えに娘をバンコクなどの性的娯楽施設に送り込むエージェントの役目を果たしている場合も多い<sup>42)</sup>。娘たちは、たとえ売春婦になっても、バンコクなどの都市部で高収入を得て実家を建て替え、両親に多額の仕送りをすれば、村でも評判の孝行娘という評価を受け、これに続けと若い娘たちがどんどん性的娯楽産業に吸収されていくことになる<sup>43)</sup>。学歴の低い女性たちは低収入の仕事にしか就くことができず、それでも、家族を養いたいという願いや売春に対して比較的寛容なタイ社会のありかたが、女性たちを性的娯楽産業へと導くことになる。加えて、タイ社会が男性の買春に対しても比較的寛容であり、国民の可処分所得の増加とツーリズムの発展も相まって、性的娯楽産業が発展していくことになる。

性的娯楽産業の発展の背景にある経済的利益に関する研究はさほど多くないが、たびたび記事にされるジャーナリズムの報告によれば、この部門を取り締まる立場にある官憲の側が、逆に、これを奨励しているというものが見られる。たとえば、タイの英字紙『バンコク・ポスト』によれば、警察官や政府の役人がタイ南部のソクラーにおける売春婦殺害に関与したことや<sup>44)</sup>、性的娯楽産業に関わりをもつ政府の高官や役人の中には国会議員のメンバーも含まれており、中にはタイ人女性を日本の性産業に送り込むのに関与した人物もいるという<sup>45)</sup>。

#### 4. 現代タイにおける売買春の実情

このように1960年代頃から急速に発展してきたタイの性的娯楽産業であるが、次に、この分野の規模について検討を加えるとともに、具体的にどのような性的娯楽産業施設があるかを簡単に整理しておこう。

#### (1) 売春婦の数・特性・収入

タイの性的娯楽産業の規模についてはその実態が把握しにくいこともあり、なかなか正確なところはわからない。たとえば、売春婦の数についても、7.5万人という数字から280万人という数字まで研究によってさまざまである。エイズ問題の深刻化が最も懸念されていた1990年の人口センサスでは、15歳から29歳の年齢層にある女性は830万人だし、2000年時点での総人口が約6,300万人なので、売春婦の280万人という数字は、タイの女性全体に占める売春婦の割合が1割近いという数字になる。これはやや大げさな見積もりであろう。一方、タイ保健省が1992年に行った調査によれば、国内にある性的娯楽産業施設は6,026カ所であり、売春の数75,376人という数字が発表されているが<sup>46)</sup>、このような政府の統計資料がどれほど実態を把握できているかいささか疑問であり、数字に表れない実情を考慮すれば、この数字は実態よりも少ないといえるだろう。売春婦の数に関して、ゴッドレイはもっともたびたびに推計値として出される数字(50万人～100万人)から、約70万人程度ではないかと推測する<sup>47)</sup>。この数字は、15歳から29歳の女性人口の約8.5%に相当する。また、エスノグラフィックな方法を用いて、売春婦の数を15万人から20万人程度であると見積もっている研究もある<sup>48)</sup>。この中間値をとって、売春婦の数を17.5万人と見積もるとすると、これは15歳から29歳の女性人口の約2.1%ということになり、かなり現実に近い数字といえるかもしれない。

ただ、このように売春婦の数を見積もること自体、非常に難しい作業である。売春婦と一口にいてもその形態が多様化しているのに加えて、一時的に性的娯楽産業施設で働く女性や、一旦こうした仕事をやめて再び性的娯楽産業に戻ってくる女性など、流動化する数字の実態を正確に把握することがなかなか困難なためである。ボンチャラクシとゲストは、蓋然性のある数字として15万人から20万人という数字を挙げ、特定の1年間だけをとれば20万人から30万人程度の女性が性的娯楽産業で働いているのではないかと見積もっている<sup>49)</sup>。

では、どのような女性たちが売春婦として働くことになるのだろうか？バンコクのあるマッサージパーラー（後述）で働く女性の状況を例にとってみよう

表5 バンコクのマッサージ・パーラーで働く女性の状況

項目	1980年調査 (%)		1992年調査 (%)	
出身地	北部	48.0	北部	60.0
	東北部	26.0	東北部	20.0
	中部・南部	22.0	中部、南部	20.0
	その他	4.0		
年齢	バンコクに来た年齢		マッサージ・パーラーで働きはじめた年齢	
	15歳以下	18.8	15歳以下	11.1
	16～19歳	31.3	16～19歳	46.3
	20～23歳	39.6	20～23歳	24.1
	24歳以上	10.3	24歳以上	18.5
働く理由	家庭の貧困	85.0	家庭の貧困	64.8
	夫との離別	10.0	高収入獲得	24.1
	地元の仕事がない	5.0	子どもの養育	1.9
			その他	9.2
教育 (最終学歴)	未就学	40.0	未就学	1.9
	小学校卒	56.0	小学校卒	79.6
	中学校卒	4.0	中学校卒	16.7
			高等学校以上	1.9

出所：ボンパイチャット, P. 1984『マッサージ・ガール』(田中紀子訳) 紀伊國屋書店 1992年および, Boonchalaksi Wathinee & Philip Guest 1994 *Prostitution in Thailand*, Institute for Population and Social Research, Mahidol University.より作成

(表5参照)。1980年、1992年の調査のいずれも、北部出身者、東北部出身者が7～8割を占めていることがわかる。また、バンコクに来た年齢やマッサージ・パーラーで働き始めた年齢も、いずれの調査においても16歳から23歳が7割を占めている。1980年の調査では、マッサージ・パーラーで働く理由として、家庭の貧困を挙げた女性が85%と圧倒的多数を占め、夫との離別(離婚・死別)を引き離しているが、1992年の調査では、家庭の貧困のためと答えた女性の割合が減少(約65%)し、高収入を得るためという回答が増加している。これらの女性たちの学歴にしても、両調査とも小学校卒以下が圧倒的に多く、1980年の調査では小学校を卒業していない女性も40%みられた。このように、貧困や学歴がこのような性的娯楽産業施設で働く大きな原因になっており、これと、先述した両親や家族を養うという女性への社会的役割期待が絡み合った結果、

表6 タイの産業別平均収入と主な性的娯楽産業における売春婦の月収(推定額)

	職種	月収 (バーツ)		売春形態	月収 (バーツ)
一般業種	全産業(全国平均)	8,698	売春婦	会員制クラブ	75,000
	全産業(バンコク都)	10,566		カラオケクラブ	65,000
	製造業	8,652		ゴーゴーバー	50,000
	電気・ガス・水道	8,517		ナイトクラブ	50,000
	建設業	11,312		マッサージパーラー	43,125
	卸売・小売・ホテル	6,268		ディスコ	37,500
	運輸・通信・倉庫	7,572		コーヒーショップ	28,750
	金融・保険・不動産	12,445		コール(電話)	28,750
				理髪店	28,125
				ホテル	26,250
				冷気茶室	22,500
				置屋	22,500

出所：一般業種に関しては、『タイ国経済統計集 1998/99年版』(1998)より作成。売春婦については、Phongpaichit et al. 1998より作成。ただし、特に売春婦の収入についてはあくまでも目安であり、業種、年齢、客層、状況、地域などに応じて、かなりのバリエーションがあることに留意する必要がある。

マクロレベルにおける経済や社会の変化や国際関係の変化の中で、売春婦の供給がすすんでいることがうかがえる。

ところで、性的娯楽産業で働く女性たちはどのくらいの収入を得ているのだろうか? また、その収入は一般の産業別平均収入とどのくらい違っているのだろうか? 表6から明らかのように、性的娯楽産業で働く女性たちは一般業種で働く人たちよりもはるかに高い収入を得ている。最も収入の高い会員制クラブで働く女性たちが得ている75,000バーツは全産業の平均値(8,698バーツ)の約8.6倍となる。また、チェンマイなどの地方都市では、レストランやガソリンスタンドの従業員の月収は3000～5000バーツ程度だし、飲食店で働く大学生のアルバイト代が5～6時間で100バーツ程度である場合<sup>50)</sup>なども少なくないことから、性的娯楽産業で働く女性たちの収入がいかに多いかがわかるだろう。

1992年に実施されマヒドン大学のワーティニー教授グループの調査では、バン

コクのマッサージ・パーラーで働く女性の家族への1ヶ月平均の送金額は6,151バーツであった。これを1年間に換算すると1人の売春婦が家族に送金する金額は73,811バーツになり、ほぼ同時期のタイ北部における1人あたりの県民総生産23,328バーツ、東北部の14,931バーツ、全国平均の44,095バーツを上回る数字である。もちろん、調査のサンプルや調査時期などによるばらつきは考慮しなければならないが、タイ国内の性的娯楽産業で働く女性たちの経済的貢献が近年のタイ経済全体に大きな役割を果たしていることは否定できない。タイにおける売買春については国の内外からさまざまな批判がなされているが、抜本的な改善策を見い出すにいたっていないのは、性的娯楽産業がタイの経済構造に深く組み込まれているためということができる<sup>51)</sup>。

## (2) 性的娯楽産業の種類と形態

一口に売春婦や性的娯楽産業施設といっても、そのあり方や形態は多様である。古くは、売春婦の家が売春宿となり、またアヘン窟が喫茶室に変わり最近では喫茶のほかに性的サービスを提供するようになるなどの変化がみられるし、日本の場合と違って理容室や美容院において性的サービスが行われることもある。また1960年代以降、商業的なセックス・ツアーが盛んになるにつれて、性的サービスが受けられるマッサージ・パーラーや買春が可能なナイトクラブなどととも、ビア・バーやダンスクラブなどが営業を開始した。ベトナム戦争当時、タイに駐留していたアメリカ軍兵士の現地妻（貸し妻 *mia chao*）の形態は、現在では数日間から数週間という期間、タイを訪れる外国人男性旅行者に性的な楽しみを提供する売春の一形態として存続している<sup>52)</sup>。ここで、現代タイに存在する一般的な性的娯楽産業施設についての記述を試みてみよう<sup>53)</sup>。

### \* マッサージ・パーラー

タイで「マッサージ」という場合、いわゆる「古式（伝統的）タイマッサージ」と「ソープランド」の2種類がある。後者は、タイ語で「アープ・オブ・ヌアット」（*อาปรอบ นวด*）とか英語の「*Massage Parlor*」という表記や、夜のネオンのけばけばしさでそれとわかる。首都バンコクには約150軒から300

軒ほどがあると言われているが正確なデータはない。また、パタヤなどのリゾート地、チェンマイ、ナコーン・ラチャシマー、ハート・ヤイなど地方の中心都市などにも数軒のマッサージ・パーラーが存在している。基本的には90分で数百バーツという大衆店から、5000バーツ以上という高級店まで多様である（外国人客とタイ人客の場合で値段は異なる）。広いガラス張りの向こう側にあるひな壇に、番号札をつけた女性たちが並んでいる。客は、案内係の従業員（ほとんどの場合、男性）に気に入った女性の番号を告げ個室へと向う。女性に体を洗ってもらったあと、マッサージや性的なサービスを受けるという仕組みである。中には、スーパースターと称されるモデルクラスの女性や女子大生のアルバイトなどを置いている店もある。女性の年齢、容姿などによって、サービスにかかる料金にはバリエーションがある（表5参照）。

### \* ゴーゴー・バー

首都バンコクの有名なパッポン通り、ソイ・カウボーイ通り、スクンヴィット通りのナーナー・プラザなどに多い。基本的には、店の中央にある「お立ち台」の上で女性たちが水着やトップレス姿で踊り、これを取り囲むカウンター席やボックス席に座った客は、彼女たちの踊りを見ながら、アルコールやソフトドリンクを飲む。女性たちの胸元には番号札がつけられており、客は気に入った女性を指名してドリンクをおごり話をする。これで気に入れば、店外に連れ出しデートができるという仕組みである。店外デートをする場合には、客は店に対していわゆる「連れ出し料」を支払うが、これはバンコクで大体500バーツ以上、地方都市だと300~500バーツくらいだという。気に入った女性を店外へ連れ出したあとは客と女性の自由恋愛というかたちをとるが、多くの場合、売買春が行われる。このとき女性に支払う料金は客と女性の交渉によるが、女性にとって1泊泊まりかショート（2時間程度）か、あるいは客の国籍がどこであるか、客がタイ在住か外国からの観光客か、などによって異なる。店によっては、いわゆるガトゥーイと呼ばれる「女性」（性転換をしていない場合もある）たちもいる<sup>54)</sup>。

### \* カクテルラウンジ

ディスコやパブといった10代～20代の若者が集まる場所と違い、比較的社会的地位が高く経済力のある大人たちが、店の女性を口説く場所といえる。女性を連れ出せない店、連れ出せるが容易ではない店、最初から売春目的の店など、多様である。平均的な店ではボトルキープが1本1500～2000バーツ、女性がドリンクを注文した場合、120～150バーツ（このうち女性の取り分は30～50%程度）で、日本でいうキャバクラの雰囲気を上品にしたようなところである。会員制の高級店もあるという。

### \* カラオケバー（カラオケクラブ）

カクテルラウンジと基本的にはシステムは同じである。やはり、女性の連れ出しができる店とできない店があり、連れ出しができる店でも客の男性の経済力と口説き文句次第ということになる。連れ出し料は、売春（1泊）込みで2000～3000バーツといわれ、このうち女性の取り分は店によって異なる。カラオケの曲には、タイ語はもちろん、英語、中国語、日本語、韓国語などがあり、現地に駐在する外国人の客も多い。

### \* コーヒーショップ・援助交際喫茶

コーヒーショップは、フリーの売春婦たちがドレスアップしてやってくる場所である。バンコクにあるGホテルが有名だが、ここに限らず、ホテルのバー、ロビー、レストランなどがある。値段は客と売春婦の直接交渉によるが、客の特性（国籍、年齢、タイ在住か旅行者か、など）と売春婦の年齢や容姿によってさまざまである。援助交際喫茶も、基本的にはコーヒーショップと同じで、売春を目的とした女性と買春を目的とした男性が集まってきて、ドリンクを飲みながら気に入った相手をさがして、交渉を行う。スクムヴィット通りのA店は、多くの日本人（現地在住者や観光客）が訪れることで有名である。

### \* 置屋・売春宿

置屋は女性を多く抱えており、客は自分の気に入った女性を選ぶ。個室がある店と連れ出すところと2種類がある。泊まりで500バーツくらいからあるという。地方から出てきた少女が最初に勤める風俗店で女性が若いのが特徴とい

える。また、売春宿は置屋とシステムは同じだが、一見、民家のようなところにあり、看板などは一切出していない。タイ語で「ソン」(ซอญ)といい、地元のタイ人客が多い。中にはミャンマー人、ベトナム人、中国の少数民族出身者などを雇っている店もあり、不法就労者を働かせている店もある。チェンマイなど地方都市にある置屋街は200バーツというところもある。

### \* 冷気茶室

ヤワラーとよばれるバンコクのチャイナタウンにある、華僑や華人経営の簡易売春宿である。通常1階がレストランで、脇にある階段を上った2階に小さな個室がある。女性も若く、ミャンマーやラオスなどから騙されて連れてこられた少女たちを監禁状態で働かせている店もあったという<sup>59)</sup>。

### \* エスコートクラブ

外国人相手の同伴女性斡旋所。バンコク（タイ）滞在中の個人ガイドとして、基本的に1泊2日で女性が客につくシステムで夜も客と一緒に泊まる。料金は5000バーツくらいから数万バーツの場合もあるという。片言の英語や日本語が話せる女性が多く、バンコク市内では、明らかにそれとわかる女性を連れてくる日本人男性旅行者を見かけるし、西洋人の中にはエスコートガールを伴って、リゾート地に遊びに行くことも少なくないという。

### \* 素人売春・その他

実態がつかみにくいですが、たとえば、デパートの女性店員、美容師など、素人の女性が「どこかに行きませんか?」「食事しに行きませんか?」などと声をかけてくることがあるという。また、バス停でバスに乗らず、厚めの化粧をした女性が客待ちをしている場合もある。ディスコなどに、売春を目的にやってくる若い女性たちもいる。また、床屋や美容室の中には、理髪師や美容師が全員女性で、妙に愛想がいい場合、ヘアカットなど通常の業務のほかに、手や口でのマッサージサービスを行うところもある。また、近年では専門学校生や女子大生による援助交際も増加しており、中には売春ブローカーが買春可能な女子大生のリストを作成し、これが闇ルートで出回っているという<sup>59)</sup>。

## 5. 「サービス・ガール」の周辺—その語りと事例—

売買春に関してはさまざまな調査研究が行われてきたが、正確にはなかなか実態がつかみにくいことは先に述べたが、男性研究者にとってもまた女性研究者にとっても、フィールドワークが極めて困難な分野である<sup>57)</sup>。筆者はタイ人やタイ滞在中の日本人・外国人の友人たちの手助けを借りて、幾つかの性的娯楽産業施設で働く女性たちにインタビューをし、彼女たちの仕事の様子についての参与観察を行ったりした。ここでは、これらサービス・ガールたちの周辺について、彼女たちの語りやある施設の事例をミクロなレベルで紹介することによって、これまで述べてきた現代タイにおける売買春をめぐるマクロな状況の一端を確認し、理解する手だてとしてみよう<sup>58)</sup>。

### (1) サービス・ガールたちの語り<sup>59)</sup>

#### \* マッサージ・パーラーで働く女性たち

EMさん (20歳 ランパン県出身)

私は現在20歳でランパン出身です。チェンマイにあるマッサージ・パーラーで働き始めてからほぼ1年が経過しました。私の故郷のランパンには、両親と姉1人妹1人が住んでおり、姉妹たちは2人とも結婚しています。私は、17歳のときにつきあっていた男性との間に子どもができたために18歳のときに結婚しましたが、現在はその夫とは離婚しています。3歳になる娘が1人いますが、実家の母親が面倒を見てくれます。両親は私がここで働いていることを知りません。両親に対しては、コンビニエンス・ストアで働いていると嘘をついています。もし母親が私の仕事を知ったら、とてもがっかりすると思いますのでとても本当のことは言えません。

1ヶ月に5日～8日の休暇があります。休みのときには、娘や両親に会うためにランパンの実家に帰ります。実家から再び私がこの町に仕事に行くときには、娘が泣くのがとてもつらいです。ソンクラーン(タイ正月)のときには、休みをとって娘や両親たちと遊びに行きたいのですが、ソンクラーンのときにはこの町にたくさんの観光客がやってきてかき入れどきなので休めないかもし

れません。

私が働いているマッサージ・パーラーはCホテルの中にあります。1時間半のマッサージと入浴サービスでお客さん1人につき1200バーツです。そのうち私がもらえるのは半分以下の500バーツです。そのほかは、お客さんからいただくチップが収入になります。女性2人を指名し「サンドイッチ」<sup>60)</sup>という遊びをする客もいますが、私はいやです。できればやりたくありません。またエイズが怖いのです。だから絶対にコンドームを使います。お客さんの中にはコンドームを使いたがらない人もいますが、エイズが怖いのでお願いして絶対に使ってもらうようにしています。この店は大体午後2時に開店し、夜は12時(土日は午前1時)に閉店します。お客さんはタイ人だけでなく、日本人や欧米人など外国人も少なくありません。

Wさん (24歳 ナコン・パノム出身)

私がチェンマイのマッサージ・パーラーで働き始めてから2ヶ月が過ぎました。この店で働く前は、故郷のナコン・パノムで実家の農業を手伝っていました。20歳のときに結婚しましたが、現在は夫とは離婚しています。娘がいるのですが、2歳5ヶ月のときに事故で亡くしてしまいました。事故で亡くした娘のことはやっと忘れられましたが、そのときはとてもつらかったです。私は長女で2人の妹がいます。妹たちはすでに学校は卒業しています。母親はナコン・パノムに住んでいますが、母と父は離婚しています。父は母と離婚したあと、別の女性と再婚しています。

私は不良だったので15歳のときに煙草を吸い始めました。今でも仕事をしている日は(午後1時から午前1時まで)に1日に1箱くらい吸っています。お酒はビールが好きです。私の勤める店はPホテルの中にありますが、タイ人だけでなく外国人のお客さんもやってきます。もちろん日本人も来ますが、みな嘘つきなのであまり信用していません。明らかに奥さんがいるのに独身だと言ったりするからです。私の収入は月に8000バーツくらいです。あとはお客さんからもらうチップが収入になります。お客さんの中にはコンドームを使いた

がらない人もいますが、絶対に使ってもらおうようにしています。私はマッサージ・パーラーの裏手にある従業員用の寮に1人で住んでいます。お客さんがこの店に支払う料金は500~1500バーツとさまざまで、タイ人と外国人では料金が異なります。もちろん、外国人のほうが高いです。受付にいる男性従業員（ナーイ・ナー：タイ語で、仲買人、ブローカー、仲介人などを意味する）が「この店には以前来たことがありますか?」「そのときはいくらで遊びましたか?」などとお客さんに尋ね、客の反応をみながら価格を告げるのです。

Aさん（26歳 チェンマイ県出身）

私は26歳でタイ北部の出身です。チェンマイのマッサージ・パーラーで働くようになってから2年になります。20歳のときに結婚して娘（当時4歳）をもうけましたが夫とは離婚しました。娘は現在、母親が面倒をみています。母も父とは離婚しています。私は母や娘と一緒に住んでおり、自宅から愛車の日本製自家用車で通っています。大体、30~40分かかります。私がマッサージ・パーラーで働いていることを母は知っています。特に何も言いません。私自身は長女で、左官業をしている弟とホテルのフロントで受付をしている妹がいます。4歳になる娘はテレビのアニメが大好きです。特に日本の「クレヨンしんちゃん」を楽しみにして観ています。

私が働いているマッサージ・パーラーの料金には2種類あります。850バーツと700バーツです。いずれの場合も私の取り分はお客さん1人につき500バーツです。けれども、外国人客や旅行者の場合1500~2000バーツという料金をとられることもあります。この店は昼の12時に開店し夜の12時に閉店します。1日12時間の勤務です。この間は基本的にはガラスばりのひな壇の中に座って、お客さんの指名を待つこととなります。私たちの側からお客さんのほうはほとんど見えません。少しだけ見えます。座ってお客さんの指名を待っているときはテレビを見えています。店からは3ヶ月に1度のエイズ検査を義務づけられていますが、私自身は自分で毎月1度は大きな病院に行き検査をしています。常に検査をしてエイズウィルスに感染していないことを確認して、安心して仕

事をしたからです。休みは月に3日ですが、このほか生理のときは仕事を休めます。そのためのお休みが7日間あるので、月に10日くらいは休むことができます。ソンクラーンのときも休みです。だからソンクラーンのときには娘を連れてこの町に遊びに来るつもりです。

私はときどきタイ・スキのレストランにタイ・スキを食べに行くことがあります<sup>61</sup>。タイ・スキと日本風のスキヤキの違いは知っています。日本風のスキヤキは甘いのであまり口にあいません。特にMレストランの辛いタレが好きです。以前、チェンマイに観光に来た日本人男性とオフを過ごした（売春をし、その男性の観光にもつきあった）とき、一緒に日本食レストランに行って寿司を食べたことがあります。私が働いている店は、マッサージ・パーラーだけでなく、カラオケクラブ、バーなどもある複合娯楽施設ですから日本人をはじめ旅行者もよく来ます。特にトゥクトゥクの運転手が客引きをしてお客さんを連れてくることもありますから、日本人だけでなく外国人のお客さんの相手にすることも少なくありません。

#### \* ゴーゴー・バーで働く女性

ENさん（24歳 ナコンサワン県出身）

私はバンコクのN地区にあるゴーゴー・バーで働いて4ヶ月になります。私が働いている店にはたくさんの女性が働いています（インタビュー当時14~5人がいわゆるお立ち台の上で踊っており、あと14~5人がフロアにいた）。女の子の多くはイサーン（東北タイ）出身で、ナコンサワン出身は私だけなのでここにはあまり友だちがいません。

私は中学（3年）を卒業したあともしばらくは故郷のナコンサワンで暮らしていました。バンコクに来る前はナコンサワンにある会社で働いていたのです。22歳のときにある男性との間に子どもが生まれましたが結婚はしていません。子どもは女の子で今2歳です。娘の面倒はナコンサワンにいる両親が見ています。母は2年前に手術をしたので仕事をしておらず生活が苦しいです。私は4人きょうだいの3番目です。両親には月々5000バーツの仕送りをしています。

私の給料は高くありませんから自分のもとにはほとんどお金は残りません。現在、私はバンコク市内のアパートに1人で住んでいます。休みはほとんどありません。月に1度休みをとりますが、そのときは3～4日間故郷のナコンサワンに帰ります。

この店ではお客さんにドリンクをおごってもらっても1杯につき20バーツしか私の取り分はありません（ドリンク自体は大体60～120バーツ）。だからあとはお客さんにオフ（連れ出し）してもらって（売春で）稼がなければいけません。お客さんと寝るときは必ずコンドームを使っています。もし、コンドームを使いたがらない客がいても、絶対に使います。それでも、コンドームを使いたがらないしつこいお客がいたら、使ってくれるようねばり強く説得します。エイズが怖いから当然です。

エイズといえば、私の女友だちが（タイ国内の）あちこちのバーやカラオケで働いていたのですが、エイズウイルスに感染してしまいました。彼女は200～300バーツで売春をしていたのですが様々なところ働いていたためか、お客さんとのセックスの際、コンドームを使わないこともあったといいます。私たちはどうして立場が弱いので、ときにお客さんのいうことをきかざるをえないのです。その友だちは瞬間にやせ細っていき、腕を始め、体のあちこちに斑点ができていました。とてもかわいそうでした。その友だちの母親は、娘がエイズウイルスに感染しているとは微塵も思っていませんでしたが、周りから「あなたの娘はエイズウイルスに感染しているよ」といわれ、落ち込み、悩み、病気になって、とうとう亡くなってしまいました。本当にかわいそうな話です。ですから、私は絶対にコンドームを使うのです。

#### \*カラオケ店で働く女性たち

Gさん（23歳　メーホンソン県出身）

私は23歳でメーホンソンからチェンマイのカラオケ店<sup>62</sup>にやってきました。ここで働くようになってあまり長くありません。私は7人きょうだいの4番目ですが、メーホンソン出身のある女性の紹介（つて）でこのカラオケ店に働き

に来ました。私は長女ではありませんから両親への仕送りはしていません。両親は私がカラオケ店で働いていることは知りません。両親にはこの町にあるレストランでウエイトレスとして働いていると言っています。私は自分が働いているカラオケ店の裏にあるホテルの1室を借りています。そこには客さんと寝るための部屋もあります。私は、仕事のとき以外はずっと部屋で寝ています。毎日、朝の3時頃仕事が終わってから少し夜食を食べて部屋に帰ったあとは、ずっと寝ていて午後4時頃起きます。軽く食事をして8時の出勤に備えるという毎日です。だから来たばかりのこの町のことについてはまだ何も知りませんし、どこにも行ったことがありません。町の西方にある山の山頂近くにある有名なD寺院のことは知っていますが、そこにすら行ったことがありません。月々の給料は基本給が2500バーツで、あとはお客の指名料、お客からのチップ、オフ（店外への連れ出し料と売春料）が加算されます。オフの代金は2時間以内で2000バーツ、朝までお客とつきあえば3000バーツで、そのうち、私がもらえるのはそれぞれ1200バーツ、2000バーツです。

Nさん（17歳　チェンマイ県出身）

私は17歳の専門学校生です。地元の鉄道駅近くの専門学校に通っています。私がアルバイトをしているカラオケバーは日本人女性が経営しています。私はここでバイトをして半年以上になります。週に3日くらい働いています。母親は私がカラオケバーで働いていることを知っていますが、父親（42歳）は知りません。ここでバイトをしていることが父にばれるとどんなめにあうかわかりません。ですから母も父には内緒にしてくれています。

私のバイト代は基本給が月に3000バーツで、あとはお客さんが注文した飲み物代の50%、お客さんの指名によって隣に座った場合のチャージ料（1時間200バーツ）の50%という歩合制になっています。実家は、この町の隣のH郡にあります。現在はこの町にあるアパートに友だちと一緒に住んでいます。この店のお客さんはほとんど100%近くが日本人では日本人でタイ人はほとんど来ません。タイ人が来るときは必ず日本人と一緒にです。この店には20人くらい

女の子がいますがほとんどバイトで、みんな学生です。私のように専門学校生もいますが、大学生や短大生もいます。この町の教育大生もいますよ。この店には女の子を連れ出すオフのシステムはありません。だから、私みたいな学生でも安心してバイトができるんです。カラオケといっても、いろいろあるんです。でもときどきお客さんに口説かれることはありますし、中には日本人の恋人がいる女の子もいます。お客さんが皆日本人なので、みんな日本語の会話本や日本語を勉強するためのノートを持っています。私も日本語を勉強したいです<sup>63)</sup>。バイトは店が開く夜の7時から12時まで5時間です。専門学校が終わったあと、夕方5時から1時間、アフタースクールで英語の勉強をしてからこの店にバイトに来ます<sup>64)</sup>。

## (2) カラオケ店のシステム～A カラオケの事例～<sup>65)</sup>

A カラオケはタイ北部のある地方都市を南北に貫くP川の川沿いにある。この店ではおよそ50名の女性たちが働いている。この女性たちを統括する「ママさん」(日本語である)と呼ばれる4人のチーママがおり、さらにその上にタイ人女性の雇われ店長がいる。このほか10名ほどの男性従業員がおり、うち2人は駐車場係、残りは客に出すアルコール、つまみ、くだものなどを準備する仕事やカラオケ機器の操作をする仕事をしている。また、女性たちのメイク係として4人のガトゥーイが雇われている<sup>66)</sup>。

女性たちは夕方から7時頃までの間に出勤する。出勤してからしばらく食事をとったりおしゃべりをしたりして過ごし、メイク係のガトゥーイに化粧をほどこしてもらう。開店は午後8時頃であるが、この時刻前後から女性たちは三々五々店の入り口付近のコの字型のソファに腰掛けて客の指名を待つ。閉店は深夜1時だが、店内に客がいればときに午前2時か3時頃まで開いている。たまに行われる警察の営業自粛通達によって閉店時間が早まるが、数日するともとの営業時間に戻る。

客は店に入ると、店の入り口付近にコの字型に並べられたソファに座っている女性たちの前に立ち、お気に入りの女性を指名する。女性たちには2つのグ

ループがあり、客に水割りを作ったり、一緒にカラオケを歌ったり、スキンシップサービスを行ったりする接客サービスに加えて売春も行う「オフあり」の女性と、売春は行わず店で接客サービスのみを行う「オフなし」の女性に分かれる。

店の1階の大部分のスペースはオープンスペースのボックス席であり、1階の一部と2階には「VIPルーム」と呼ばれる個室が大小10室ほどある。中にはビリヤード台が部屋の中央に置いてあるような大部屋もあり、大人数のグループ客がここを利用する。個室のルームチャージは部屋の広さに応じて300～600バーツと様々である。客は女性を隣に座らせ、ビールや水割りなどを飲みながらカラオケを熱唱したり、女性と談笑したりする。ときに酔い客が女性への過剰なスキンシップを要求することもあるが、女性は基本的に拒否をしないよう教育されている<sup>67)</sup>。客が指名した女性に払う金額は1時間あたり200バーツであるが、これに自分で飲むドリンク代と女性たちが飲むドリンク代が加算される。また、注文をとりにくるチーママのドリンク代も加算されるシステムになっている。注文したドリンク代金のうちの女性たちの取り分はこの店で働いた期間によって決まっており、最初は客が支払う金額の30～50%程度である。女性たちの休日は基本的には月に2日しかなく、無断欠勤をすると1日あたり300バーツの罰金が科せられる。ここで働く女性たちの衣装は1着650バーツと750バーツの2種類(3着=白、薄い緑、薄い青)がある。入店するときには女性が買い取らなければならない、給料天引きであるため、最初は大変なのだそうだ。衣装のクリーニングは、この店のメー・バーン(掃除、洗濯などを行う女性の従業員)がやってくれるが、月に150バーツのクリーニング代も給料天引きだという。

この店は地方のラジオ局のコマーシャルで宣伝をしていることや、衣装や女性たちの接客サービスがセクシーだという評判によって非常に人気が高い。客は地元一般のタイ人だけでなく、テレビでよく見るような芸能人も訪れる。またこの地方に駐在している外国人(日本人、韓国人、台湾人などアジア人が多いが、欧米人も訪れる)もかなり頻繁に訪れている。客は気に入った女性

(オフあり)を連れ出す際には、2時間の場合、店に対して2000パーツを支払うことになる。このうち、800パーツは店の収入になり、残りの1200パーツが女性たちの取り分(売春の代価)となっている。一晩泊まりで連れ出す場合、客は店3000パーツを支払い、女性はこのうち2000パーツを受け取る。

女性たちの年齢はすべて19歳以上となっているが、19歳よりも明らかに若く見える女性もみられる。30歳代の女性も数名いるが大半は20歳代である。一部、学生(大学生や専門学校生)がアルバイトのかたちで入っているが、数はさほど多くない。学生バイトの場合でも、オフありで売春をする女性もいる。女性たちの出身地はさまざまだが、地元の県や近隣のほかいサーン出身者が多い。また、中華人民共和国の雲南省、ミャンマーなどの出身の女性たち—シャン族、タイ・ルー族、ジンホー族など—に加えて、山地民(チャオ・カオ)出身の女性も含まれている。後者の女性たちの中には、パット・プラチャーチョン(国民証)を持っておらず、居住許可証のみ持っている女性、また居住許可証すら持っていないと思われる女性たちも含まれるようだ<sup>68)</sup>。

この店では、毎月3回、5のつく日(5日、15日、25日)に、午後2時から2時間程度の従業員ミーティングが行われている。このミーティングの場で、接客態度や接客マナーについての指導が行われたり、3ヶ月に1度のエイズ検査結果の提出が義務づけられたりするという。

## 6. グローバル化の中の売買春

### ～トランスナショナル・エスノグラフィーの必要性～

本稿では、主としてタイ国内における売買春をめぐって、その歴史、現代における多様化、事例などについて述べてきた。アユタヤ時代までさかのぼることができるタイの売買春は、チャクリ王朝期に中国人などの移民の到来とともに確立していくが、特に20世紀後半のベトナム戦争期におけるアメリカ軍兵士駐留の時期に拡大し、その後は経済発展や観光産業の発展とともに展開してきた。しかし同時に、売買春を発展させる社会文化的背景としてタイ特有のセク

シュアリティやジェンダーが絡んでおり、また、経済発展に伴う国内の社会経済格差が特に北部や東北部の娘たちを性的娯楽産業に供給する経路となってきたことも事実である。1960年には売春禁止法が制定されたが、1966年に成立したサービス産業法の下で売春の形態は多様化し、女性たちは「特別サービス」を行う存在として客の要望に応えることになった。

国内だけでかなりの数にのぼると思われるサービス・ガールたちだが、彼女たちへの需要と供給のパターンはタイ国内に限定されているわけではない。グローバル化しトランスナショナルな人の移動が進行する現在において、タイにおけるサービス・ガールの供給源としてはミャンマー、カンボジア、ラオス、中国の雲南省など近隣の諸国・地域が含まれるようになり、またタイ人女性たちも日本、台湾などのアジア諸国やドイツをはじめとするヨーロッパ諸国に送り出されており、さまざまな問題を抱えているのである<sup>69)</sup>。このように、国境や地域を越えたグローバルな売買春のネットワーク形成がなされており、そのような問題意識にたった研究もなされはじめている<sup>70)</sup>。売買春のエスノグラフィーにも、グローバリゼーションとトランスナショナリズムをふまえた新たな方向性が望まれるといえよう。

## 注

1) 片山隆裕 1999, 2002, 2003など。

2) Boonchalaksi & Guest 1994 p.1

3) 「売春婦」をあらわすタイ語には、soopheenii (โสเภณี) という言葉が、また、売春宿に相当する言葉としては、soong (ซ่อง) がある。しかし、少しソフトなニュアンスをもつ言葉として、phuuyin borikaan phiseet (ผู้หญิงบริการพิเศษ) (=特別なサービスを提供する女性、すなわちサービス・ガール) という言い方をすることが少なくない。本稿のタイトルで、「サービス・ガール」という用語を使用しているのは、こうした理由による。

4) 売春は、「カネ目当ての、乱交的な、習慣的または断続的な性的結合の行為。売春は、従って3つの主要な要素、カネの支払い、乱交、情緒的な無関心によって特徴づけられる」と定義される(『ブリタニカ百科事典』(平凡社)の定義による)。売春については、それを反社会的な性の逸脱行為として規制する社会がある一方で、合法的な婚姻の枠内では、社会全体の性的欲求を満足させることはできないとして、売

- 春の制度化をはかる社会もある（ブーディバ, A. 1980 178~9ページ）。現代社会においても、売春は表面的には取り締まりがなされている場合が多いが、非公式には性産業が盛んな場合も多く、どの社会でも売春とその規制との間のダイナミズムが恒常的に存在しているといえる（ベベル, A 1982 177~90ページ）。
- 5) タイにおける売買春の歴史に関しては、主として、Thanh-Dam Truong 1990, Boonchalaksi & Guest 1994 に依拠している。
- 6) Mettarikanond 1983
- 7) サムベン地区で最も有名だったのは、ラマ4世~5世の治世に売春婦として稼いだフェーン夫人の所有した売春宿である。彼女は、売春によって稼いだお金で寺院を建築したが、この寺院は文字どおり「売春の利益によって建てた」ということを意味するカニカポン寺院と呼ばれていた（Tupthong 1983）。
- 8) Institute for Population and Social Research (以下 IPSR) 1991.
- 9) Mettarikanond ibid.
- 10) Hantrakul 1983 p.6
- 11) Saisawat 1986
- 12) バンコクのラーチャブーラナ寺院には日本人の納骨堂があるが、ここにタイ国内で死亡した日本人の過去帳が保存されている。この過去帳の中に、1897年（明治30年）に死んだケイ子、ハナ子、梅子、チズ子、シン子、花子、イシ子、初子ら、姓氏の記録がない長崎県、熊本県出身の女性の名がみられる。バンコクのニューホテルと旭ホテルに身をおいていたこれらの女性たちは「からゆきさん」であろう（綾部・永積編 1982年 266-7ページ）とされる。このように、近代におけるタイの売春産業に、日本女性が組み込まれていった事実も忘れてはならない。
- 13) Commission of Enquiry 1933 p.316
- 14) Pluksongsawalee 1982 p.158
- 15) ibid.および、ボンバイチット, P. 1984 p.43による。この法律が厳密に適用されたら、マッサージ・パーラーの多くは消滅するはずである。しかし、マッサージ・パーラーはすべて、法的にはバーや食堂として登録されている上に、地元の警察の保護さえ受けている。すなわち、警察官はそのオーナーから十分な賄賂を受け取っており、めったに手入れは行われない。手入れはたまにガス抜きの意味で行われるか、賄賂の金額をめぐって行われるにすぎないようである。
- 16) Boonchalaksi & Guest ibid. p.20
- 17) 当時の北ベトナム爆撃の約8割が、タイの基地から飛び立った戦闘機によって行われた。
- 18) もともと小さな漁村であったバタヤは、この条約を受けて開発されたリゾート地である。
- 19) マッサージ・パーラーというのは、日本でいうソープランドにあたる性的娯楽施設である。これは1960年代に日本経済のタイ進出とともにタイに持ち込まれ、急速

- に広まっていった。タイでは「アープ・オブ・ヌアット」(aap・op・nuat) と呼ばれている。
- 20) *Business in Thailand*, November, 1981: p.44
- 21) 日下 2000 p.59
- 22) 日下 前掲書 p.58
- 23) タン・ダム・トゥルン 前掲書 pp.324-5 および 日下 前掲書 p.57を参照し、若干、表現に修正を加えている。
- 24) 1990年代に入って以降、海外からの観光客の男女比における男性の割合は減少しているが、観光客の数自体は増加しているので、これに応じて男性の観光客の実数は増加している。
- 25) Limanonda 1992
- 26) Soonthorndhada 1992
- 27) Santasombat 1992
- 28) Boonchalaksi & Guest ibid. p.6
- 29) 美人コンテストで優勝をしたり入賞をしたりした女性には、名声と金とスターとしての地位が約束されるが、一方で、有力な政治家や財界人などの愛人候補にもなる。このような状況は、たとえば、タイ映画『クラスメイト』の中に描かれている。また、タイでは現在もあらゆる機会にミスコンテストが開催されており、人々の関心をよんでいる。
- 30) バスク・ボンバイチット 前掲書
- 31) Skrobaneek 1986
- 32) Wongchai 1988
- 33) *Bangkok Post* (November 11, 1992)
- 34) Santasombat 1992
- 35) Brummitt and Flatters 1992
- 36) Alpha Research Co. Ltd. (ed.) 1999
- 37) やや過剰な見積もりと思えるが、例えば、日本で働くタイ人女性の売春婦の数は約7万人という指摘もある（*Bangkok Post* 1993. 12. 22）し、ドイツをはじめとするヨーロッパへも、偽装結婚その他の方法で出稼ぎ売春が行われている。逆に、隣国の中国雲南省やミャンマーから、女性たちが売春婦としてタイ社会に流入しているという事実もある。これら売春婦をはじめとする女性の国際労働移動については機会をあらためて考察することとする。
- 38) Clement, H. 1961
- 39) 『タイ国政府観光庁統計年報』による。
- 40) バンコクにあるマッサージ・パーラーの中には、アジア諸国からのツアー客に対して特別料金を設定しているところもあるという（Boonchalaksi & Guest ibid. p.15）。
- 41) Blanc-Szanton, M. Cristina 1990.

- 42) タイ北部バヤオ県のドムカムタイ地区のある村では、10年ほど前まで村の娘たちのほぼ全員がブローカーの誘いによって村を出て売春婦になっているほど、売春婦の供給村としてよく知られている。一方、この村を含むバヤオ県は、HIV ウィルス感染者がタイで最も多い県としても知られている（2001年現在）。
- 43) 1993年に筆者が1ヶ月ほど調査のために滞在したチェンマイ県内のある農村でも、バンコクや日本などに娘が（売春婦として）出稼ぎに行っている家が複数あり、これらの家は伝統的な高床式の家屋から近代的でモダンな家に生まれ変わっていた。
- 44) Bangkok Post (November 11, 1992)
- 45) Bangkok Post (March 19, 1993)
- 46) Havanon, N., Knobel, J. and T. Bennett 1992 *Sexual Networking in a Provincial Thai Setting*. AIDS Prevention Monograph Series Paper No.1, AIDSCAP: Bangkok.
- 47) Godley 1990.
- 48) Sittitrai and Brown 1991
- 49) Boonchalaksi & Guest *ibid.* p.32
- 50) 2000年8月から2001年8月まで、筆者がチェンマイに滞在していたときに知り合ったタイ人の大学生たちから直接聞いた情報である。
- 51) 日下 前掲書 66～70ページを一部参照した。
- 52) このほか、タイ女性の売春に関しては、約20万人が日本、香港、シンガポール、マレーシアなどのアジア諸国やドイツをはじめとするヨーロッパ諸国で、出稼ぎ売春を行っているという報告（IPSR 1991）があるが、これらの女性についての議論は、別稿にて行う。
- 53) 性的娯楽産業施設に関する記述に関しては、別冊宝島『タイ読本』（1995年）と、バンコクで出版されている日本語や英語の情報誌数冊も参照している。
- 54) 近年、日本人研究者によるゴーゴー・バーについて経営人類学的研究が登場した（市野沢潤平 2003）。
- 55) 2000年に、低年齢の少女たちとの性交渉や売買春に歯止めをかけるための法規制が厳しくなったため、表面的には少女たちの数は減少しているという。また、店は18歳以下の少女たちには、客に年齢を聞かれた場合、法律に抵触しない「19歳」と答えるよう、指導しているところも少なくないと聞く。
- 56) この情報は、チェンマイのある語学学校に勤務するタイ人のB先生のご教示による。
- 57) たとえば、日本人客専用であるバンコクのタニヤ通りでのフィールドワークに基づく日下陽子の『タニヤの社会学』（めこん）は優れたエスノグラフィーであるが、調査者自身が女性であることから、実際に買春を経験した男性への間接的インタビューなどに頼らざるを得なかったことが記されている。また、調査者が男性の場合、「客」でなく「調査者」であることをいぶかしがられることが多く、調査者の意図や目的を理解してもらうのに時間がかかる。
- 58) ここに掲げる事例の収集に際しては、タイ人、日本人、タイ滞在中の外国人をはじめ、多くの人々に協力をいただいたことを付記し、これらの方々に感謝申し上げたい。
- 59) ここに掲げたサービス・ガールたちの語りは、2001年から2005年にかけて行ったインタビューの一部である。インタビューに関して、マッサージ・パーラーで働く女性たちには、店が終わったあと深夜に女性たちが夜食をとる屋台で行った。ゴーゴー・バーで働く女性に対しては、耳をつんざくような大音量でディスコミュージックが流れる店の店内のカウンターで彼女たちの仕事に行った。また、カラオケクラブの女性たちに対しては、彼女たちが働く店できに日本語やタイ語の歌を歌いながら、またときに水割りのグラスを傾け世間話をしながら行った。彼女たちの正面に座り、フィールドノートとテープレコーダーを片手に行うようなフォーマルなインタビューと違って、彼女たちはリラックスして本音で話をしてくれたと思っている。インタビューに協力してくれた彼女たちに謝意を表したい。
- 60) 客の男性1人が女性2人を相手にして遊ぶこと。バンコクで発行されている日本語の娯楽情報誌『Gダイアリー』によれば、女性6人を一度に買春した伝説の日本人男性客がいるという。
- 61) タイ風すき焼き料理だが、日本のすき焼きとは違っており、しゃぶしゃぶや水炊きに食べ方が似ている。春雨、豆腐、白菜、葱、鶏肉、豚肉、牡蠣、海老などを入れて、タレをつけて食べる庶民の料理。鍋は真ん中が筒状になっているアルミ製の火鍋を使用する。日本に来た留学生が日本のしゃぶしゃぶや水炊きをタイに広めたという説や、日本に来るタイ人女性（じゃばゆきさん）が、日本語の「大好き」「好き」「焼きもち」「スキヤキ」などの言葉から比較的覚えやすいメニューなので、タイに戻ってから広めたとする説がある（『タイ現代情報事典』星雲社）
- 62) このカラオケ店について後述する。
- 63) このカラオケバーで以前働いていた日本人男性（50歳）によると、この店では経営方針が二転三転しているらしい。当初は「オフなし」（店の女性の連れ出しによる売春なし）で営業を始めたが、3ヶ月ほど客の入りがありませんでした。その間「オフあり」の女性と「オフなし」の女性の両方を雇い経営方針を変えようということをして、オーナーの女性と相談したこともあった。結局、「オフなし」のまま営業していたが、最近泥棒にどろぼうに入られカラオケの機材を盗まれてから、25人在籍していた女の子を15人程度に減らして再出発している。この店は基本的に「オフなし」の「女子大生パブ風」の店で、日本人好みのサービスで評判がよかったのだが、次第に店の評判は落ちているという。
- 64) Nさんはタイに旅行に来ていた日本人の女子大生Tさんとメル友になり、しばらくはほぼ毎日のようにメールの交換をしていた。
- 65) インタビューに応じていただいたAカラオケの女性店長、チーママ、女性従業員、男性従業員、メイク係のガトゥーイの皆さんたちに謝意を表したい。また、この店

で働いていた筆者の知人のFさんは筆者が調査をしていた時点ですでにHIVに感染していたが、2003年に亡くなったという。冥福を祈りたい。

- 66) ガトゥーイとは、タイにいるトランスジェンダー（ときに、トランスセクシュアル）の人たちである。オカマ、ゲイなどと同一視されることもあるが、厳密にいうと異なる概念である。ガトゥーイについて、詳しくはTotman 2003を参照のこと。この店でメーク係をしていたガトゥーイのひとは筆者の知人であったが、2002年にエイズに罹って死亡した。冥福を祈りたい。
- 67) 中には店内で猥褻のかぎりをつくすひどい客もいるため、さすがの女性たちも泣き出すこともあるという。
- 68) 女性たちに国民証を見せてくれというとすぐに見せてくれる。しかし、中には、いろいろな理由をつけて、決して見せない女性もあり、タイ語にもかなり訛りがみられる場合があること、タイのことをほとんど知らない女性がいることなどから、このように推測することができる。
- 69) 在日タイ大使館がタイの英字紙「バンコク・ポスト」に発表したところによると、日本国内で売春を行ったタイ人女性の50人近くが毎年エイズによって死亡しているという。
- 70) たとえば、タン・ダム・トゥルン1993, Mahatdhanobol, V. 1998, Thorbek, S. and B. Pattanaik 1998, Chantavanich, S. et.al 2001, などの研究がある。

### 引用・参考文献

- \* Alpha Research Co. Ltd. (ed.) 1999 *Thailand in Figures 5<sup>th</sup> edition* 1998-1999.
- \* ブーディバ, A. 『イスラム社会の性と風俗』(伏見塾代子訳) 桃源社 1980年
- \* 別冊宝島(編集部) 『タイ読本』 宝島社 1995年
- \* ベベル, A 『女性と社会』(ソンビョンリョウル訳) ハンバツツ出版社 1982年
- \* Blanc-Szanton, M. Cristina 1990 Gender and Inter-Generational Resource Allocation among Thai and Sino-Thai Household. (in) Leela Dube (ed.) 1990 *Structures and Strategies: Women, Work and Family*, New Delhi: Sage pp.175-200.
- \* Boonchalaksi Wathinee & Philip Guest 1994 *Prostitution in Thailand*, Institute for Population and Social Research, Mahidol University.
- \* Brummit, W. and F. Flatters 1992 *Exports, Structural Change and Thailand's Rapid Growth*, The Thailand Development Research Institute.
- \* Chantavanich, S. et.al 2001 *The Migration of Thai Women to Germany: Causes, Living Conditions and Impacts for Thailand and Germany*, Asian Research Center for Migration, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University.
- \* Clement, H. 1961 *The Future of Tourism in the Pacific and Far East*. A Report prepared by Checchi and Company under contract with the United States Department of Commerce and

Co-sponsored by the Pacific Area Travel Association.

- \* 独立行政法人労働政策研究・研修機構 『海外労働情報 タイ』(ウェブサイト) (<http://www.jil.go.jp/foreign/kunibetsu/thailand/thailand.htm>)
- \* Godley, Jenny 1990 *Prostitution in Thailand*. In NIC: Free Zone of Prostitution, Institute for Population and Social Research, Mahidol University. Pp.84-101 (in Thai).
- \* Hantrakul, S. 1983 *Prostitution in Thailand*, Paper presented at the Women in Asia Seminar Series, Monash University, Melbourne, 22-24 July.
- \* 市野沢潤平 『ゴーゴー・バーの経営人類学—バンコク中心部におけるセックスツーリズムに関する微視的研究』 めこん 2003年
- \* Institute for Population and Social Research 1991 NIC: *Free Zone of Prostitution*, Mahidol University. IPSR Publication (in Thai)
- \* 片山隆裕 1999 「タイにおけるエイズ問題の社会文化的脈絡」 『アジア太平洋研究』 3号 財団法人アジア太平洋センター  
 ———— 2002 「タイにおける麻薬問題とエイズ」 『国際文化論集』 17巻1号 西南学院大学・学術研究所  
 ———— 2003 「タイにおける開発パラダイムの展開とエイズ対策—チェンマイ県サンパトン郡の事例を中心に—」 『国際文化論集』 18巻2号 西南学院大学・学術研究所
- \* 日下陽子 『タニヤの社会学』 めこん 2000年
- \* Mahatdhanobol, V. 1998 *Chinese Women in the Thai Sex Trade*, Asian Research Center for Migration, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University.
- \* Mettarikanond, D. 1983 *Prostitution and Policies of Thai Government during 1868-1960*. Thesis submitted to Graduate School, Chulalongkorn University. (in Thai)
- \* 新津晃一・秦辰也(編) 『転機に立つタイ—都市・農村・NGOから』 風響社 1997年
- \* Limanonda, B. 1992 *Women Population and Development*, Paper prepared for Conference of Population Programme Policies: New Delection, Chiang Mai.
- \* Leslie Ann Jeffrey 2002 *Sex and Border: Gender national Identity, and Prostitution Policy in Thailand*, Silkworm Books.
- \* Pluksongsawalee 1982 Women and Law (in) S. Prasith-Rathsint and S. Piampiti (eds.) *Proceedings of the Seminar on Women in Development: Implications for Population Dynamics in Thailand*, Bangkok, The National Institute of Development Association.
- \* ポンパイチット, P. 1984 『マッサージ・ガール』(田中紀子訳) 紀伊國屋書店 1992年
- \* Phongpaichit, P., Piriyaangsan, S. and T. Nualnoi 1998 *Guns, Girls, Gambling, Ganja: Thailand Illegal Economy and Public Policy*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- \* Saisawat, S. 1986 *Attitude of Senator Assembly on Solving Prostitute Problem in Thailand*,

Thesis submitted to Graduate School, Mahidol University.

- \* Santasombat, Y. 1992 *Women Trafficking : Community and Prostitution in Thai Society*, Local Development Institute : Bangkok (in Thai).
- \* Sittitrai Weerasit and Tim Brown 1991 *Female Commercial Sex Workers in Thailand : A Preliminary Report*. Bangkok : Thai Red Cross Society..
- \* Skrobaneck, S. 1986 *Strategies against Prostitution : The Case of Thailand*, Bangkok : Foundation of Women.
- \* Soonthornhdada, A. 1992 Individual Role Behavior, Expectations and Adaptions : Past and Present, (in) Bencha Yoddumnern-Attig et. al (eds.) *Changing Roles and Statuses of Women in Thailand : a Documentary Assessment*, Institute for population and Social Research, Mahidol University.
- \* タン・ダム・トゥルン 『売春—性労働の社会構造と国際経済』(田中紀子, 山下明子訳) 明石書店 1993年
- \* Thorbek, S. and B. Pattanaik 1998 *Transnational Prostitution : Changing Grobal Patterns*, London and New York : Zed Books
- \* Totman, Rrecharad 2003 *The Third Sex : Kathoey-Thailand's Ladyboy*, Silworm Book.
- \* Tupthong, T. 1983 *Green-Lantern Women*, Chaophraya Press, Bangkok (in Thai).
- \* Wongchai, Y. 1988 *Socio-Economic Factors Affecting Going to Work in Sex Sector of Other Communities*, Unpublished Report from Faculty of Social Welfare, Thammasat University